

32 『江談抄』五、「又被申者、栗田障子詩輔正卿撰之、坤元録詩維時卿撰、然則作者与判者、各互有長短、随其功也、栗田詩、以言以帥殿方人不被入之、怨言言、雖坤之録詩、絶句一首者何不罷入哉云々、故文章博士実範、後伝聞此事、不被許此言云々。」『続本朝通鑑』正暦五年八月条「道兼築別荘栗田。巨麗驚目。館中四壁。画名山水。請歌伯題詠之。房中佳人無数。請菅輔正。撰當時詩人秀作。書於障子。唯江以言以下与伊周一睦上故。不入其撰。以言恨之。此時道隆伊周与道兼交惡。云々。」

33 「藤原道信朝臣送父読和歌語第卅八」

34 寛和二年十月廿一日条。「右大臣息(道信)於淑景舍御前加元服。摂政養子也。授従五位上」(『日本紀略』)

35 後撰集卷三、一〇五番詞書に「助信が母みまかりて後も時々かの家に敦忠朝臣のまかり通ひけるに桜の花のちりけるをりにまかりて木のもとに侍りければ家の人のいひいたしける」とある。

36 『紫式部とその時代』所収。

37 前掲論文『中務家の人々』

38 39 『平安朝歌合大成』巻二

40 渡辺純子氏『中務小考』による。

附記 本研究は昭和四十九年度文部省科学研究助成費による研究の一部である。

(受理 一九七四・一〇・二二)

書。

- 14 『今昔物語』廿四ノ三八にも道信の相如へのはなむけの同歌がある。ここでは「中将」とする。
- 15 『円融院御集』では「重之かかうふり給はりて云々」とあり、右肩に「集相如也」との注記がある。重之は蔵人から国司とはなっていないし、相如が円融天皇の蔵人であったことから推してもここはやはり、相如が正しかろう。「しけゆき」「すけゆき」の類似による誤りであろう。
- 16、詞書は六十六首分あるが、62番の歌を欠くため、歌数は六十五首
- 17 『馬内侍集』〇八番(三手文庫本)すけゆきあふきををこせてこれはいかにわすれやしにといひやりたれば「郭公わするらむこそうの花のかけとそふへきわれとしらすや」。
- 18 一三八「むまごの大納言の君一条せうさうの女歌合せしにすけゆきが夜の梅 匂ふかのしるべならずは梅の花くらぶの山にも折りまどはまし」山口博氏「中務家の人々」(『王朝歌壇の研究』村上冷泉円融納篇所収)の御意見による。
- 19 「資子内親王於_二昭陽殿_一 有_二藤花宴_一。天皇臨御。宴訖。内親王叙_二一品_一。」(『日本紀略』)
- 20 『平歌朝歌合大成』(二)
- 21 「天元元年八月十七日己巳。大納言藤原兼家卿息女初入_二掖庭_一。候_二梅壺_一。梅壺。名詮_二子_一」(『日本紀略』)
- 22 「貞元二年十一月九日乙未…今日。一品内親王遷御_二大納言為光卿第_一。(『日本紀略』)
- 23 『平安朝歌合大成』(二)
- 24 (天延元年)二月廿九日条「内大臣女藤原嬪子入内」。七月一日条「詔以_二皇后昌子内親王_一為_二皇太后_一。以_二女御藤原嬪子_一為_二皇后_一」。(天元二年)六月三日条「寅刻。皇后藤原嬪子崩_二于堀河院_一。卅三。」(『日本紀略』)
- 25 『栄花物語』△花山たづぬる中納言▽
- 26 『本朝皇胤紹運録』「一代要記」『栄花物語』△月の宴▽
- 27 『権記』長保三年二月三日、四日条に詳しい。
- 28 『栄花物語』△さまざまのよろこび▽。薨去は永延元年八月二日。三十九才。(『一代要記』『日本紀略』)
- 29 源氏物語では「親しく仕う奉る人の中川のわたりなる家なむこの頃水せき入れて涼しきかげに侍る。田舎家たつ柴垣して前裁など心とめて植ゑたり、風涼しくして、そこはかとなき虫の声々聞え、蛩繁く飛びまがいてをかしきほどなり。人びと渡殿より出でたる泉にのぞきゐて酒飲む。」と紀伊守の中川の家を描写している。なお、この描写について、角田文衛氏は「紫式部の居室」の中で、「もしかすると彼女は、近所の藤原相如の邸宅を頭において紀伊守の家を述べたものではなからうか。」と記されている。
- 30 『小右記』正暦四年三月六日・同五月三十日条など。
- 31 これについては熊本守雄氏論文「粟田山庄障子絵と和歌と漢詩」恵慶集と江吏部集」(『国語と国文学』昭和四十二年七月号)にくわしい。

束の間のよろこびとして消え去り、相如も又後を追うという悲運にあったと思われる。もし長らえて道長の全盛時代までも在ったとすれば、相如の歌人としての運命も現存する資料のままではおそらくなかつたろう。しかし、彼の祖父から受け継いだ歌才はやがてその子女たちにうけつがれ、さらに孫の隆資・命婦乳母（兼澄の血統をも引くが）らに伝えられて行ったといえる。

資料が示す限り決して華々しい歌人ではなかつたが、後撰の風をうけ拾遺時代に生きた群小歌人の一人として、輔親が、家集の序の中で和歌詠作の場面として、

妖艶のなかだち花鳥のつかひ契接の暁産生の夜或は離別餞送のをしみ或は
哀泣恋慕のなぐさめ山川野望の所煙霞の夕を見て友を尋ね興にのりて酔に
よる云々。

と記した如き日常生活に於ける詠歌をもって歌壇の底辺を支えた一人としての意味を思ふのである。

「注」

- 1 山口博「中務家の人々」（『王朝歌壇の研究』冷泉田融花山朝篇所収）
- 2 渡辺純子「中務小考」（『香椎瀉十七号』）『大中臣家の歌人群』保坂都等
- 3 「相如集校本と研究」（『香椎瀉』十三号）
- 4 「敦忠ノ中納言南殿ノ櫻ヲ読和歌語第卅二」
- 5 「延長七年三月踏歌後宴の御遊の事」に「敦忠笛をふき」とある。
- 6 相如の父については、(1)助信（大鏡裏書）(2)相信（本朝画史）(3)助俊

（松平文庫本奥書）の三説あるが、「助信」が正しい。これについては石川ひろみ氏「相如集校本と研究」（『香椎瀉』十三号）に考察がある。

6 『平安朝歌合大成』（別二）（五五）（六〇）による。

7 「冷泉院御集」にも所収。

8 続後拾遺和歌集五四四「親の田舎へ下りけるに申し送りける」

9 『平安朝歌合大成』別二・六〇・七七による。

10 延暦寺沙門真覚者。権中納言藤原敦忠卿第四男也。初在俗時。官歴ニ

右兵衛佐一。康保四年出家。從レ師受ニ。兩界法阿弥陀供養

法一。三時は修一生不廢。臨終之時有ニ微病一。相ニ語同法

等一。曰。有ニ尾長白鳥一。嘔曰。去来去来。即向レ西飛去。

又曰。閉目即極楽之相髣髴現前。入滅之曰。誓願曰。我

十二箇年所^レ修善根今日惣以廻向。極楽入滅之夜。三人

同^レ夢。衆僧上ニ龍頭舟一。来。相迎而去。

11 伝燈大師千観条「権中納言敦忠卿第一女子久以為^レ師。

相語曰。大師命終之後。夢中為^レ示ニ生處一。入滅末^レ幾。

夢閉梨上ニ蓬華船一。唱ニ昔所^レ作弥陀讚一。西行焉。」

『今昔物語』十五ノ十六「比叡ノ山ノ千観内供、往生セ

ル語」にも載る。

12 『平安朝歌合大成』（二）「応和二年五月四日庚申歌合」条

「ある人のたまはせける。女房に御心よせありとてよめりけるそのこと

どもは、枇杷の大納言難じければ、その北の方のよめるとか」と注す。

13 家集15、16番の贈答「ひはとのにてこゆみのかけ物にせられける」と詞

(6) かねゆきの兵部佐にひはならふをたちきゝて

47 ひとことはよくなしけるをいかなれはわれにあふ手をしらせさるらんから49までの贈答。

(7) まくらかへるとて

50 君にいかてならへてみんとよとゝもにおもひきたへこよひとめ
てん

と続くのである。或は大胆な憶側に過ぎるかも知れぬがあえて提示してみた次第である。

九 歌 風

詞花和歌集卷八恋下の冒頭に

人しづまりてこといひたる女のもとへ、待かねてとくまかりたりければ、かくやはいひつるとて出逢ず侍ればいひ入侍ける

きみをわがおもふこゝろはおほはらやいつしかとのみすみやかれつゝが挿ばれている。これは、大原の縁で急がれる心に炭焼を言いかけて詠んだものであるが、相如の歌枕への関心は、古今集一〇九二東歌をふまえ類音のくり返しを用いた

いなふねのいなみなはてそもかみ川見なればこそはながれてもみめや、武隈の語のもつ意味からの連想と類語のくり返しを用いた
いまさらになにたけくまのたけからんこゝろのうちになつはおひつゝなど。また序詞に用い縁語懸詞にまつわれた

つにくにのなにはのあしのほのかにもねにきと人にいひつへきかな

などをはじめ筑摩・宮城野・あまの川・かつらぎ・くめじのはし・住吉の岸・柏木森・菅田池・かるきが池・響灘などを詠みこんだ十六首程にみられる。当時の歌人としては当然のこととは言いながら歌枕への関心の程を窺うことができる。

又、縁語、懸詞にまつられた複雑な技巧を用いたものは少ないが、なおふちころもはつるゝそてのいとよはみなみたのたまのぬくにみたるゝの如く優に用いたものもあり、相如の歌は、王朝和歌の美意識の粹から決して逸脱するものではない。そして歌風は概して上から詠み下した平明なよみぶりと言えようである。

十 おわりに

以上周辺のながら相如の家系・交遊などについてみてきたが、総じて言うことは、相如は時平の曾孫という出自からか、官位にも恵まれていたとは言えないと共に、歌人としての立場にも決して恵まれた存在ではなかったことである。残された和歌資料には、はかばかしくない栄達をかこつ訴嘆調の歌も全く見られず、むしろ歌は奇妙に明るいものが多い。が、これは生来の陽気さがそれを助けていたのかも知れない。恵まれない人々が常にそうであるように相如の交遊も近親・主従・友人・恋愛等の生活上の諸要素からの結びつきと相俟って、風雅に志すものささやかながら花をめで、月をめでてしばし雅境に遊んだものであったろうが、中河の邸に於ける元輔や能宣らとの雅交は、河原院に於けるわび人のそれにも似た境ではなかったかと思うのである。後撰集撰者とも交遊があり、一応の歌人ではありながら相如が公式の場をふむ機会を持ちえなかったことは、ようやくめぐって来た道兼の世の栄光も

られる。

また相如集五八番に

大納言のきみにまたしかりしときのことなるべし

58あふことをたなるきみをいはの上になかせてみるはひさしかりけり

がある。事情に明るい篇者が詞書を補ったものでもあろうか。交際の時期は、前述の兵部卿らと親交のあった頃のことと思われる。因みに、大納言の君が

その出仕名からして女三宮に出仕し初めたのは、父君伊尹が大納言であった
康保四年(967)末から天禄元年初(970)の間のことかと渡辺氏は推定されている。

相如集に、先述した「大納言の君に離れゆく」とてうらみらるゝころ」と詞

書した歌の直前に一連の恋愛贈答歌ともいふべき応酬の一群がある。それが
実に27〜50まで、二十四首にも及んでおり、やや物語的な構成、詞書ながら、

女性が「女三宮におかしといはるゝ人」であり、その間に兵部卿・九の宮の
名も語られることから、この女性が大納言の君と同一人ではないか。又その
なれ初めのふざけた応酬から、「枕をとりにかえる」に至るまでをやや戯画化

したのではないかと思われる。わずか六十六首(実質六十五首)のうち、
二十四首の贈答歌の占める位置は大きい。そしてその後51「こと女の四月

一日にうすさのといひたるに」とあり、更に前述の52「女三(宮)の大納言
の君にかれゆく」とてうらみらるゝころ」53「おなし人ひんなき所にきたりし

に」と続くのである。従って「こと女の」と態々ことわった51も、24〜50ま
での如くして恋愛関係にあったのに離れ方となった相如に、事情を知る「異

女」が「うすさの」と詠みかけたのに返歌したものと解されなくもない――
と考える。51以下は兎も角として、27〜50までの大略をあげると次の七部

から成り、相如の人間の一面をのぞかせる。

(1) わかゝりしとき女三宮におかしといはるゝ人にいかて物いはむとお

もふにおさなきちこのあふきに女をこのかたをかきてもたるにたか
そとへはその人のといらふれはかくかきつく

(2) 27 いひいてはそらもやはちむやまとなるすかたのいけのかけのたかはぬ
に始まる30までの贈答

つねにいひたはるゝをはしめよりの人あれはわつらはしかりていら
へもせぬをとのゐしてつとめてありくちおしくてみかうしはなちて

手をたゝけはふとよりきたりにけてかえりぬみかうしあくる人にた
れそとへはあさかほにさして

(3) 31 つゆのとくおきてみつればあさかほをにくけなりともおもひつるかな
から38に至る一連の贈答

兵部卿宮御前に人くおほかるにもていてゝはしめよりのことをか
たりきこえわつらふいとくちはかりけりとて

(4) 39 にくけなるあさかほよりはかゝみくさこゝろをみるにおもひかゝりぬ
より41までの贈答

二日はかりありてやる。
42 そこふかくおもふこゝろはあしまよふうきにもうつるかけをみしより

(5) 八月に兵部卿宮九の宮人くあまたしてふみつくる草むらになくむ
しこゑたかけれとなくかりよりは。といふ題をこゑはいときゝ

にくし 人くわらひて例の人
右の詞書にはじまる43〜46の贈答

「かけあきら」は、『中務集』にしばしば名の出る「かけあきら」と同一人であろうか。相如も又、「中務家族圏内」の歌人であったことからしても親しい間柄であったのだろう。とすると山口氏・渡辺氏の想定される「源景明」ではないかと思う。

また、相如の女の一人に源兼澄に嫁した人がいる。兼澄は先述の景明とは同じ光孝源氏でもあり、交流がある。相如と兼澄の交遊関係を裏づける歌資料はないが、歌人同志ではあり、娘婿であってみれば、おそらく少なからず交流があったのではないかと思う。

以上『相如集』と私家集などから相如の交遊関係についてみて来た。家集にはこの他に、「これのりの少将」「なかきよ」（中清カ）「かねゆきの兵衛佐」の名がみえるが該当人物がわかりかねるので省略した。

八 大納言の君との関係

相如と大納言の君との関係については、すでに「中務」集研究の立場から考察されてはいるが、相如集の面から見ていささかの憶測をつけ加えてみたい。「大納言君」と呼ばれる女性は、すでに先学の述べられる如く、『中務集』御所本¹³⁸に

むまごの大納言君、一条せうさうの女歌合せしに すけゆきが夜の梅とあって、中務の孫に当り、一条摂政伊尹の女である。母は中務の女「いどの」、光昭と兄妹である。詳しくは前掲先学の二論文に尽されているので省略するが、相如は、その大納言の君と恋愛関係にあった。家集五二に

女三乃（宮）大納言の君にかれゆくとしてうらみらるゝころ

52 かすならぬよをうきふねのよるへなみ ひゝきのなたのなくをこそまてとあるのからすれば、大納言君は女三宮、即ち保子内親王のところに出仕していたのである。

次いで五三番には

おなじ人とちいひんなき所にきたりしに

53 さともなく志るへたになき山みちにこのもといかて人やとるらむ

とあり、これは「おなじ人」又はイ本で「おなじとち」とあって、前者は三者的表现ではあるが、前の歌をよんだ人の意で相如をさすものと思われ、又後者は明らかに大納言の君と相如を指しているが、この二首は、御所本『中務集』に次の如くあり、その間の事情がより明確になる。

むまごの大納言君こそすけゆき通ひしを一所にてみぐるしければ来たるを帰すがいとゆゝしければ をば君

235 里もなくしるべも見えぬ山道のこの程いかで人宿るらん

すけゆきとうちみかはしてあはぬ頃おとこ

236 数ならぬ身を浮舟はよるべなみひゞきの灘のなぐをこそまて

かへし

はふし

237 なぐまなくひゞきの灘はあるれどもやがて通はぬ舟はきこえず

となっていて相如集と順は逆であるが二首とも揃っている。「里もなく」の歌は、大納言君の祖母中務の作、「数ならぬ」は離れ方の頃の大納言君の代作をした法師の君との贈答である。この法師は、山口博氏は「中務家の人々」の中で大納言の君の兄弟、すなわち一条摂政御集にも出ることから「伊尹」・「いどの」とも関係深い人と見て、伊尹の子「行源」でないかと推定してお

きかった。この詞書の「いとめでたう興じて物かづけられけりとかや」に伊尹のつつみ切れない喜びがあふれていよう。推定では相如二十才頃のことと思われる。蔵人以前のことであろうか。

さてこの「すけあきら」は仲文集・能宣集・公任集などにもその名が見えるが、おそらく同一人で、菅原文時男「輔昭」ではないかと思う。

輔昭とすれば、「父子相伝の文章家」（江談抄五）に教えられ、『二中歴』「詩人伝」にその名を連ね『本朝文粹』『和漢兼作集』『扶桑集』などに入り、和歌は『拾遺集』以下に四首入る和漢兼作の人であった。また、天延二^{注38}年三月十日一条中納言為光歌合には「兵部大輔輔昭」として義懐、惟成、中清・長能らと出場しており、貞元二年八月十六日当時歌壇のパトロンを任じた頼忠の豪華な詩人歌人の顔ぶれを並べた「三条左大臣頼忠前裁歌合」にも元輔、能宣、順、兼盛らと共に座を列ねている。この時序者をつとめた父の文時が七十九才の高令であったことから推すと、花山院誕生当時輔昭は四十才余りにはなっていたであろう。これも又年令的にはずい分差のある友人である。輔昭の仲文との全く気のおけないやりとりなど、二人の人となりをしてばせて楽しいが、元輔にしても相如にしてもそうした機智的な楽しい性格の一面があったのであろう。

この歌の直前に伊尹関係の歌が二首入っている。62は歌を欠き、詞書も明りょうでないが何かふざけ合っているつごもりの詠作らしい。相如の人としての面、ひごろの生活の一面の窺える場面である。

62詞 一条摂政にてしはすのつこもりにかたひのまねしてさみしきまゝにおうはうことするにかとのもちひ人にさえかしひにいたさせ給いひ

つけて

歌欠

こひする人にくやうするとあるにすけゆき

63あつまりて物なおもひそおのこともあけんみかとのもちひなりけり

「一条摂政にて」とあることからすれば、伊尹が天禄元年五月二十日摂政となつた後の大晦日ということになるので、天禄三年十一月一日伊尹が薨じらるまでの間、すなわち天禄元年の大晦日ないしは翌天禄二年大晦日のいずれかの詠作である。

一条摂政との関係については詳しくわからないが、伊尹は忠平の孫にあたり、相如の父助信とは二従兄弟の関係にあった。そして助信が少将の頃、宇佐の使に発つ時に餞の歌を詠んだりしていることからみても相如親子と一条摂政家とは何らかの交渉があったものと見られる。また、相如は、伊尹の女の一人「大納言の君」とは恋愛関係にあった。62 63にもたくまぬ相如の姿がある。こうした相如の姿は次の歌の中にも見られる。

かう二位の大將(ママ)とのゝさふらひの人くともさみしかりとてすきゆきかけあきらがもとにいひやりたれはすけゆきからものゝくたものゝなかにせにふたついで

65ともしきをたかこゝろはと人とはいさしらすくつゆとなたつや

高二位成忠の侍の者からの座興の機待に応えたものであろう。つれづれをなぐさめる機智的な楽しい歌人として、同僚の間には楽しい雰囲気をかます人物であつたらしいことが察せられると共に、当時の貴族の日常生活の中に根強くとけこんだ和歌の実態を語っている。「すけゆき」と名の並んでいる

まれば高かった。道信は、正暦元年七月二日養父兼家の没後、道兼の養子に迎えられ、道兼の妻の妹国章女を妻とした。道信が道兼の養子となったことは何と云っても相如と近くさせたと考えの一つのよすがであろう。身分ひくきに甘んじているとは言え、相如の粟田道兼を嫁しての若き歌人道信との交流は極めて自然な結果というべきであろう。道信の餞の歌にもその淡々たるよみぶりの中に对等の関係というよりは、家司的存在の、しかし歌の道では先輩でもある相如への思いやり、細やかな友情が感じられる。

六 能宣・元輔との交遊

後撰集撰者大中臣能宣・清原元輔の家集に相如の中河の家での詠作がある。元輔集

すけゆきが家に冬の月の面白きにまかりて侍りしに

19238 いざ斯ており明してむ冬の月春の花にも劣らざりけり

能宣集（西本願寺本）

相如が家にて月あかきよ、やり水のもとにて人／＼よみ侍し

419 みなかみにながれたえすばこのやどにちよありあけの月のかけみむ

冬の月を賞で、また遣水のもとで観月の歌会をする——共に相如邸から、東山に出る月を賞美しての詠作である。

能宣集の「人／＼よみ侍りしに」との詞書からすれば、風雅の士の誰彼がこの中川の邸に集うての月見の詠歌であるらしい。中川の家の栄花物語の描写については前述したが、池・遣水・築山など趣をこらしたものであったらしい。中河は、『拾芥抄』によれば「京極川号^ス中川」とあり、源氏物語帯木の「な

かゝはのわたり」の『河海抄』注には、「旧記曰京極川二条以北を号^ス中川」云々 東川 加茂川 西川 桂川 京極川」とある。加茂川近く流れていた京極川の二条以北を「中河」と称した様である。そこに東山を望む趣をこらした庭をもつ相如の邸は折すぐさぬ風流の徒の観月の集いにはふさわしい「場」であったのだろう。この邸は、参議源等の家で、助信の母が伝領し、相如に伝えられた旨、角田文衛氏は「紫式部の居宅」の中で述べておられる。^{注36}

これら当代一流歌人と相如との交遊の事実について山口博氏は「元輔・能宣という後撰作者の圏内に相如が（中略）加わりうる可能性をもつ事は重要である」と記される。^{注37}

後撰集拾遺時代における相如の位置を知る援けとして看過できぬところであろう。

七 すけあきら、かけあきらとの交遊

「すけあきら」との交遊を暗示するものに家集六四番の歌がある。

花山のみかとうまれたまひて後比なれはいとめてたうけうして物か
つけられけりとかやをもしろすすけあきらのもとへやりし

64 きてもみる人しなればわかやとのもみちはよものかせにまかせつ

庭の紅葉を惜しんで、すけあきらに見に訪れることをうながしたものである。この歌の詠作時は、相如集にしてはめづらしく詞書により明らかである。花山院の御生誕は安和元年十月二十六日、時はまさに伊尹・兼通・兼家兄弟間での激しい覇権争いが表面化しつつある折の事であった。こうした時のこととて、花山院師貞の誕生は祖父伊尹一門にとっていやが上にも喜びは大

り、相如の妻に参議安親の女がある。安親は中正の息男であつて道兼の母時姫とは兄妹である。従つて道兼と相如の妻とは従兄妹の關係になる。こうした縁籍關係にあり、折から道兼と道隆・伊周側とは対立的であつたことから中関白側に追従することがなかつたのではないかと思われることと、また道兼の文学的理解が一つの要因をなしたものでなかつたらうか。

正暦年間に於ける道隆の勢いは花々しいものであつたが、定子の後宮はさておき、父関白の下への出入りの文人歌人は少なかつた。道隆は文人たちのパトロンの存在ではなく自ら詩会を催すということもなかつたようである。そうした兄に比して道兼はどうであつたか。

道兼自身は『拾遺集』に一首、『続古今集』に二首の計二首の勅撰歌人であつたが、正暦元年正月廿五日道隆の女定子が入内すると、娘のいないことをうらやましく思い粟田山莊を造営したことは有名である。『小右記』によれば、永祚元年(989)二月三日・四日条

深更從權大納言御許有御消息。仍着直衣参詣、有作文・和歌等、雲上侍臣多以会合。 四日乙卯辰時許從權中納言御許帰宅。

正暦元年十一月十五日条

右將軍被留車於門外(同)車詣粟田山莊。

などであつて、自邸で作文和歌会などを催しており、山莊が出来上るとそこでしばしば様々な行事が行われたらしい。女院詮子も度々訪れている。『栄花物語』に

粟田といふところにいみじうおかしき殿をえもいはず仕立て、そこに通はせ給て、御障子の絵には名ある所々をかゝせ給ひて、さべき人々に歌よ

ませ給。世の中の絵物語は書き集めさせ給。

とあり、『惠慶集』又『江吏部集』に障子によんだ歌・漢詩が現存する。又、『江談抄』、^{注32}『続本朝通鑑』の記事にも輔正の撰に成つたこと、道隆・伊周との不仲、造宮のいきさつなどについて記されている。が、こうした道兼の風雅への態度・理解も併せて相如に傾倒させる原因となつたものではなかつたかと考えるのである。

相如の歌の中には粟田山莊での詠を証拠立てるものは何一つ無いのであるが、道兼は、少くとも歌才を認めてくれ、文芸的雰囲気を楽しめる存在としての主ではあり、また折々の方違えなどには、静かに庭や月を打ながめつつ詠歌するなどの風雅がもたれたものではなかつたか。『道信集』、『能宣集』、『元輔集』、『小大君集』、『馬内侍集』などにも道兼との関連歌がある。道兼への相如の挽歌は、先述した如く相如集の最後に「二条殿うせたまひてあはれかぎりなしかし」の詞書をもって所収されている。

五 道信との交遊

家集には道信との關係を示す歌はないが、『道信朝臣集』に

すけ行の朝臣、いつもになりてきたるにせむすとて

あかすしてかくわかるゝをたよりあらはいかにとたにもとひにおこせよとあり、同歌は『今昔物語』二四ノ卅八にも語られている。^{注33}

道信は、大納言為光男、叔父兼家の養子となり元服した。兄の誠信・齊信や、また時めく権門の子息公任が十五才元服から推して、やはり元服時十五才と推定されている。相如とはずいぶん分年の違ふ存在ではあつたが、歌人のほ

46 たましひもなくなるまでにひとひわれいひころしてしひとはいけるかなど、女性も同座して相如の痛い所をずばりと衝いた応酬からは、その得意に依じて詩文・和歌をもそれぞれに作ったものと見受けられるが、相如はやはり詩文には長じていなかったものであろう。相如の現存詩文はない。

政治的な場にめぐまれない親王の常として、この宮もまた、文芸風流の道に心をよせられ、こうした文芸の場をお持ちになられたものであろう。そして相如も集いのメンバーの一人であったのであろう。

相如集の他にこの官方との贈答は、齋宮女御集・中務集・元輔集にもみえ、元輔ともかなり親しい結びつきが窺える。それぞれの関係には種々な要因があろうが、お互いの心底に存在する風雅を求める心の結びつきが、それらの要因を越えて雅交の心おきない場を形づくっていたものであろう。

四 粟田右大臣との関係

次に『栄花物語』などに詳しく、相如とは最も深い関係をもっていた、粟田右大臣道兼との関係について見ることにする。

『栄花物語』「みはてぬゆめ」巻には、次の如く語る。

あはた殿、四月つこもりにほかへわたらせ給ふ。それはいづもの前司相如といひける人の、年ごろかうの、しらせ給ふ関白どのにも参らで、たごこの殿をいみじき物にたのみきこえさせつるものゝ家なり。中河に左大臣ちかき所なりけり。ちゝのくらのかみすけのぶのあそむといひける人のつくりてすみける。池やり水山などありて、いとおかしうつくりたてゝとの、御かたゝがへどころと、いひおもひたりける家なりけり。(傍・筆者)

と。また、道兼薨去に関する記事に続くところに

かの中河の家あるじ、人よりもあはれと覚したる、またかぎりなううれしと思ひけるに、又かうおはしませば、よをこゝろうくいみじう思て此御さうその夜、こゝろざしのかぎり、火みづにいりまどひあつかひあかしたてまつりたれば、心ちもあしうなりて(中略)かの家あるじ、あはたどのにとのゐしたる夜よろづに思ひつゞけて、こひしう思きこえければ、いもねられで、ひとりごちける

夢ならで又もあふべききみならばねられぬいをもなげかざらまし

(中略)

かえりて、心ちいみじうわづらふなりけり。

家の内いみじうなげきていかにいかにとよろづに思ふ程にかぎりになりけるおりも、との、御法事にだにあはずなりぬる事をぞ返々いひける、さておなじ月の廿九日にうせにけり。

とある。相如の中川の家の描写については、早く『花鳥余情』が『源氏物語』帯木巻の「中川の家」について、「今案ズルニ此ノ物語の中河の家は、きの守が家にて、遣水前裁などありて御方違所になれり。栄花物語と相違なきにや」と指摘したところであって、『源氏物語』帯木巻の中川の紀伊守の住いの描写^{注29}に基づき記述らしい。が、表現上の潤色はともかくとして、相如が道兼には特に親しく仕える間柄であり、そうした邸宅の存した事は否めまい。

道兼と相如は、同じ北家の栄える忠平の子孫と、没落の一端をたどる時平の末ではあるが、どうして相如はときめく中関白家に近よらず道兼を頼みきこえたのか、知る由もないが強いて言えば次のような点があげられよう。つま

集をもつ歌人であり、元輔・高遠・仲文・中務・義孝・実方・公任ら当代の歌人たちとの交流のあった事は、それぞれの家集の物語るところである。高遠集に代表される如き女房たちとの歌による交遊が花やかに行なわれたのであろうし、これらの歌人たちにまじって相如も又皇子後宮に出入し、女房たちとの交流を楽しんだものと思われる。

い

次に兵部卿宮・女三宮・九の宮との交遊について考えてみたい。

家集中27「わかゝりしとき女三宮にをかしといはるゝ女にかてもいはいはんと云々」の詞書で始まる一連の贈答歌の中に「兵部卿宮御前に人／＼おほかるに云々」、「八月に兵部卿宮九の宮人／＼あまたしてふみつくる云々」とあり、相如も宮の一座に親しく列っている事がわかる。

さて、兵部卿は村上天皇の三宮致平親王、女三宮は保子内親王、九の宮は昭平親王である。御三方ともに栗田左大臣在衡女腹の兄弟姉妹である。^{注26}

致平親王の兵部卿となられた年月は明らかでないが、致平親王を中心として兵部卿をみると

三品兵部卿広平親王薨 天禄二年九月十日(971)

(日本紀略・大鏡裏書)

四品兵部卿致平親王出家 天元四年五月十一日(981)

(日本紀略・扶桑略記)

四品兵部卿永平親王薨 永延二年十月十三日(988)

(日本紀略)

となっており、就任の年月はわからないが、広平・致平・永平と順に継いでおいでになる。従って天禄二年九月広平親王薨去の後、そう遠からずして致平

親王が兵部卿に就かれたものと思われる。前掲詞書に、致平親王を「兵部卿宮」と表記する点からは少くとも、広平親王薨去以降、致平親王御出家の天元四年五月に至る約十年の間のことであろうと推定する。それは、「若かりし時」の詞書にも矛盾しない。相如の二十二、三才(三十二、三才前後の間となる。なお、致平親王は出家後園城寺に住み、岩倉に移られ、長久二年まで、九十才の長命を保たれた。三井寺に入道した成信中将は親王の第二子である。^{注27}

女三宮は没年から逆算して天曆三年生れ、「有美色、善弹琴」といわれ、後年兼家任摂政の寛和二年頃、その妻室の一人となられたが一年余りにして薨ぜられた。

九の宮は天曆八年生れ、『紀略』によれば、天徳四年十二月廿五日源姓を賜い貞元二年正四位下行右衛門督から親王に復している。永観二年三井寺に出家、のち石蔵に移り、長和二年六月廿八日六十才で薨じた。

相如のこの御三方の宮様との交流は、恋愛と絡んでいるので改めて述べるが43番の詞書に
八月に兵部卿九の宮人／＼あまたして文つくる草むらになくむしこゑたか
けれとなくかりよりは(をとるい)といふ題をこゑはいときくし人
／＼わらひて例の人

とあり、多くの人々が集い題を定めて詩文を作ったものと察せられる。また
43くさむらになくむしよりはたかけれとよくもきこえぬかりのひとこゑ
すけゆき

女

44われもまたたまつさかけぬかりなれはやまひさるまのこゑにやあるらん
45いかてかはかりにもかけんたまつさをつくりわつらふきみとこそきけ

との応酬の一連二十余首は、いはば一種のストーリーを持つ歌物語的配列をなしおもしろい。

相如の没後遠くならず、ありし日の相如をしのびつつ、女むすめか或は近親の誰かが彼の残した草稿に、収めていない歌を二、三書き加えてまとめたものではなかったろうか。

三 宮廷での交遊

相如の交遊はすべて私的な場に於けるものである。ここに言う「宮廷」も宮廷内にお住みになる一品宮・堀河中宮後宮・兵部卿宮・九の宮・女三宮との私的な交遊をさす。

(イ)

家集十番に次の歌がある。

一品宮むめつほのはきはなくらへさせたまひしに

10 くらふれとまさらさりけり花なからこの宮き野はきはきの下葉は

一品宮の御住まいになられた梅壺での詠作である。一品宮は言うまでもなく村上皇女資子内親王であろう。資子内親王は、天禄三年三月廿五日一品に叙せられ、寛和二年正月十三日落飾、長和四年四月廿六日、六十一才で薨去された（『日本紀略』）。宮は村上帝の最も愛しくされる皇女であり、同母弟の円融帝もこの姉宮と特に親しく交流なされた。

この萩くらべは宮の身边の人々とのささやかな萩の宴の興に歌をお詠ませになったものであろうか。萩谷氏は、一品宮が、天元元年四月十日の詮子注20入内に先だち、貞元二年十一月九日為光第へ移御注21なされたので、天禄三年三

月廿五日一品に叙せられてから為光第移御に至る梅壺御在住六年の間のいづれかの秋のこととされる。この場での詠は他に無く、従って参集者についても不明である。なおこの間には、天禄四年円融帝一品宮の有名な乱暮合注23、資子内親王負態の扇合せ等が権門の歌人達を集めて行なわれている。その中には中務、元輔、能宣ら相如と親しい歌人もいた。多くの当代歌人たちの出入りした一品宮のもとに、相如も蔵人としてやはりその歌才をかわれて出入りをゆるされていたものであろう。

(ロ)

堀河中宮関係の歌は二首みられる。

堀河の中宮のたくみの蔵人に兵衛のそうなる人すむときよしに

25 かしはきはきのもりのしたゆく身つからくもらはことか人のいふめる(ママ)

堀河の中宮のひとをとよものかたりしかかして（傍線筆者）

59 はかなくてあかしのうらにあさりするあまのそとそほイもはつつけさかな

返し

60 いさりするあまによそふるたもとをはなをきたりとやかけていはまし
前者は中宮に仕える女房内匠蔵人に宛てたもの。後者は詞書の傍線部が乱れていて分明でないが歌から推るに堀河中宮に仕える女性に関しての、何か悶着のようである。

注24 皇子は天延元年二月廿九日入内、七月一日皇后となり、天元二年六月三日後宮生活六年にして薨せられたが、その御有様は、「いみじうめでたう、世はかうぞあらまほしき」と思われる御様子で後宮は文芸的な今めかしい雰囲気注25に満ちみちていた。女房の中には歌人小馬命婦なども居り、皇子の弟朝光は家

者入^二。番^一之例、拾遺恋歌五、善祐法師。後拾遺雜四、橘季通。詞花恋下、藤相如是也。此外皆歌人又女房、可然人也。八代集數十卷内唯三人例也。

(『歌学大系』三 六九頁)

(傍。印ハ筆者)

とあることからみても、特にすぐれた歌人として属目される存在ではなかったことが明らかである。しかし、一流ではなかったが、一応の歌人として認められる存在ではあったのだろう。その證となるものは、「後十五番歌合」に彼の最晩年の作「夢ならでも逢うべき君ならばねられぬいをも嘆かざらまし」が、為頼と番えられていること及び『玄々集』に同歌一首が入集していることなどである。

相如の没年は、長徳元年六月廿九日であるが年令は不明である。「作者部類」に「至永祚三年」とあるのは誤りである。

年令の推定は、父助信の年令も不明であるため不確かながら、おおよそのところを一応考えておきたい。

祖父の敦忠は、天慶六年(943)卅八才で薨じた。その時助信十五才前後とみて、相如が父の二十二・三才の間に所生したと仮定すれば、天曆四・五年(951)ころの誕生となる。とすれば、蔵人は二十才〜三十才前後の間、没年は四十五・六才前後でもあったらうか。

二 家集及び現存歌

家集所収歌は六十五首^{注16}。冒頭に「いつものかみにてのちつかさなし」とあり、最後は道兼への挽歌でくくる。前後を長徳元年において中に半生の内容を盛った、一種の回想風の篇纂とみられる。公の席での詠や屏風歌の類は無く、その大半が恋歌の贈答であることが特徴であり、そしてまたそれが、当代貴族社会に於ける相如の歌人としての位置をも示すものであると言い得よう。所収歌六十五首のうち、相如自身の詠作と思われるもの四十八首。勅撰入集歌は『詞花集』以下八首。そのうち家集に無いもの三首。『馬内侍集』に一首。御所本『中務集』の一首をも加うれば、現存する相如の自作歌は五十三首となる。

家集の詞書からは、おそらく六位の蔵人頃の詠作から粟田道兼薨去に至るまで、相如の半生にわたってはいるものの、出雲守として任地に在った時の詠作や道中詠など所収されていない点からすれば、恐らく相如の詠歌のすべてを整理したものとは云えまい。

篇纂者、編纂時期については、詞書のあり方からして大半は自撰であろうと思われるが、中には

65かう二位の大将とのゝさふらひの人くともさみしかりとてすけゆきかけあきらかもとにいひやりたればすけゆきからものゝくたものゝなかにせにふたついで

の如く第三者の補入になるものとみられるものも混じる。又、物語化的傾向を帯びた詞書も部分的にみられ、殊に「女三宮にをかしといはるゝ女」

おわせぬなり。

と呼応する所であろう。道真を讒言した罪のためにその子孫は昇進しかね、人々しい人はいない。相如もその一人として「位なども浅う」なのである。相如の経歴については、家集の詞書・尊卑分脉・栄花物語・大鏡・今昔物語等の記述を総合しても、蔵人であったこと、つかさ得て出雲守となつたと、それ以後散位であったことがわかるのみである。蔵人の年代、出雲守に任じた時期などについても明らかではない。しかしおおよその見当をつけるならば次の如くなるだろう。

家集に「一品宮梅壺の萩くらべ」の詠作があり、続いて「同じ蔵人のころ」とあることから当時蔵人であったことが知られる。また致平親王の兵部卿時代・女三宮・九の宮・堀河中宮などへの出入りを示す詞書もみられるが、時代的にみてこれらもやはり蔵人時代の事と思われる。従つてその期は、致平親王が兵部卿となられたと推定される天禄二年頃、もしくは資子内親王の一品を授けられた天禄三年頃から、天元二年堀河中宮の薨去ないしは天元四年致平親王御出家に至るまでの間の事ではなかつたかと考える。相如は円融帝の御代の蔵人であろう。

また出雲守についてみるに、『栄花物語』長徳元年の記事では「出雲前司」であつて、家集冒頭の「いつものかみにてのちつかさなし」と符合する。四年の国司の期間を無事つとめ上げたとすれば、少くとも正暦二年、もしくはそれ以前に任をえていなければならぬであろう。『道信集』の道信銭の歌の詞書には「道信権中將」^{注14}とある。これを信ずれば、正暦二年九月二十一日道信の中將に転じた（『中古三十六人歌仙伝』）直後のことかとも考えられ

る。しかし現存の『道信集』が道信没後の篇纂であつてみれば、道信の極官で記すこともありうるから事実の程は分らない。因みに『国郡司表』「出雲守」の項には「見一条帝時」とある。しかしまた、『新勅撰和歌集』には次の如き円融院との贈答がある。

^{注15} 蔵人にてかうふり給はりていかゞ思ふと仰事侍りければ

藤原相如朝臣

1166年へぬる雲のはなれて芦鶴のいかなる澤に住まむとすらむ

聞しめして仰せられ侍りける

円融院御製

1167葦鶴の雲の上にしなれぬれば澤にすむとも帰らざらめや

蔵人を下りて国司として下る場面であるが果して出雲守として下つた時の贈答か否かにはなお疑問が残る。しかしそれは兎も角も相如は官人としては余りかはかしい存在ではありえなかつたようである。

扱、歌人としての相如はどうであろうか。さきに蔵人であつたと述べたが「枕草子」が「めでたきもの」（八六段）に教えた六位の蔵人に選ばれたことは、出自、政治的な面におけるそれ相当の条件もさることながら、おそらく歌の詠めることもあつて大きかつたのではなかつたらうか。しかし、生前の相如は、当時特に勝れた歌人として認められかまされられていたわけではなかつたようである。勅撰歌人とは言つても「詞花集」以下の入集であり、中古三十六歌仙の中にも数えられてはいない。そして、時代は稍下るが『八雲御抄』「卷々一番」の項に、

卷々端^{ニハ} 不^レ論^レ古人現存、殊歌人又可^レ然人詠也。卿相^{ナド}

雖^レ非^レ殊作者入^レ之。女歌又准^レ之。読^レ人不知又^レ然。背^レ両方^{ナド}之。

つとめた記事以後である。想像を逞しくするならば、前者が備中に下った時期であろうか。もしそうとすれば「承香殿」は徽子であろう。徽子と助信は二従姉弟にあたる。また若し中将内蔵頭の京官から外官に転じたとすれば、後に實方中将の例にも見るのだが、出自の良さから中将までは進んだものの後立てもなく税の上らない京官に見切りをつけたものであつたらうか。それとも内蔵頭として間もなく世を去つたものか。相如は家集の中で、

くらのかみのふくぬきし日

9 ふちころもはつるゝそてのいとよはみなみたのたまのぬくにみたるゝと父への挽歌を詠んでいるが没年は明らかでない。

叔父に、佐時・佐理・明昭がある。

佐時は、天徳三年八月の内裏詩合に非蔵人として左方人の中にあり、応和二年五月四日庚申内裏歌合には、兄助信と共に列している。時に左衛門尉であつた。また貞元二年八月十六日三条左大臣頼忠前裁歌合にも、佐時朝臣として出場しているから勅撰歌人ではないが、やはり歌の道には堪能な者であつたのだらう。

佐理は左兵衛佐正五位下にして、康保四年延暦寺に於て出家、沙門真覚となつた。『かげろうの日記』に

うえに候し兵衛の佐、まだとしもわか、思ふ事ありげもなきに、をやをも妻おもうちすて、山にはひのぼりて、法師になりけり。

(古典大系一五九頁)

とある人で、佐理の妻が文範の女であつた関係で道綱母とも交遊があつた。天元元年入滅(『扶桑略記』)。『日本往生極楽記』^{注10}に載る。勅撰歌人。文

慶僧都は、その子である。

また叔母に延光室がある。天延四年六月十四日大納言延光薨去の後、この富裕な未亡人に朝光が心を移したことは有名だが「枇杷の北の方いみじうかしようものし給ふ人なり」(『栄花物語』花山たずねる中納言)と評され、

時平の子孫、命みじかき族としての宿命を背負つたものの拭いきれない無常観から来るものであろうか、佐理と同様仏道には深く帰依した。師壇の契を

成した延暦寺の阿闍梨燈大師位千観の極楽往生の夢想を得た由『日本極楽往生記』^{注11}に載る。歌は「応和二年八月廿日、去五月庚申夜の歌合の負態」の

歌の中に一首みえる。勅撰歌人ではないが、歌人朝光との交際などから推しても相応に詠めたものと思われる。なお娘婿濟時の息、長命君、養子實方を

引取つて養育した旨『栄花物語』(月の宴)にみえる。相如にも枇杷殿での詠作がある。^{注13}

母については「和泉守俊連女」ということその他には何もわからない。母方の祖父俊連は魚名公三男末茂の流れで中納言民部卿有穂の息男である。

相如はこうした人々の血をうけ生れ育つた。『栄花物語』(みはてぬ夢)に、相如について次の如く記されている。

この相如も、かの時平の大臣の御子の敦忠の中納言の御孫なりければにや、「位なども浅う、人くしからぬ有様にてあるにや」とぞ、世の人もいひ思ひける。

これは「大鏡」(時平伝)の

あさましき悪事を申しおこなひたまへりし罪により、このおとゞの御末は

祖父の敦忠は、時平の三男、母は在原棟梁の女（『公卿補任』、『三十六歌仙伝』、『今昔物語二四ノ卅二』）とも、また本康親王女廉子（『尊卑分脈』）ともいわれるが、若し前者とすれば、在原業平の曾孫となり、豊かな歌才にめぐまれたことも故なきことではない。「形・有様美麗ニ」「人柄モ吉」「世の思へモ花ヤカ」（『今昔物語』二十四ノ卅二）で「和歌の上手」（『大鏡』）といわれ、三十六歌仙の一人。家集に『権大納言敦忠卿集』があり、勅撰入集歌は『後撰和歌集』以下三〇首を数える。また家集所収歌は、『後撰集』『拾遺集』『大和物語』とも関係が深い。また、管絃の道にも勝れ（『大鏡』・『古今著聞集』）甥の博雅卿と並び称せられたが「命短かき族」（『大鏡』時平伝）として権中納言、三十八才で薨じた。

父の助信は、従四位下、内蔵頭、右中将（『尊卑分脈』）にのぼった。少将時代には、蔵人の少将と称され、天徳三年八月十六日内裏詩合及び翌天徳四年三月卅日内裏歌合には方人として出場、応和二年五月四日庚申内裏歌合に列し歌をよみ、この年八月から翌三年正月まで五位蔵人（『蔵人補任』）をつとめ、宇佐の使にも立った（『大鏡』伊尹伝）。また、康保元年二月五日の為平親王子日の遊びにも供奉して雉をとらえている（『大鏡裏書』）。更に翌々康保三年十月七日の殿上侍臣舞には、舞人として弟の左兵衛佐佐理・高遠が奉仕したが助信は鼓に奉仕したのであろう「助信朝臣摺鼓」（『扶桑略記』）とある。助信は父敦忠の血をうけ、管絃にすぐれ、絵画にも巧みであった。『二中歴』「管絃人」の項及び『本期画史』にその名をとどめている。

記録によれば、その後円融帝の天禄二年六月廿一日には「内蔵頭」として

平野社祈雨奉幣の使を、同三年正月三日、円融天皇御元服に際しては、能冠をつとめた（『日本紀略』）。このころ中将に昇進し内蔵頭を兼任したものであろうか。中将昇進の時期、またその後の経緯については不明である。しかし、年代不分明ながら地方官として下ったらしいことが、次の資料によって窺える。

備中と因幡とである。

△新統古今和歌集▽

藤原助信朝臣、備中守になりて下りけるに、承香殿より、扇、ぬさなど給はせけるよし聞こしめして

冷泉院御製

909 我に非ぬ人のた向くる弊なれど祈りぞ添ふるとく帰れとて

御返し

藤原助信朝臣

910 君ひとり惜む思ひにくらぶれば八十氏人のたむけ何ども

この返歌は、助信の唯一の勅撰集入集歌でもある。また、

△相如集▽

いなはへくたるときゝて

23 吹風につけてもかなしいなはなるいなはにかゝるつゆの身なれば

返し おや

24 つゆの身のいなはにかゝるほともなくをのかのきはをみするなりけり

助信の少将時代からの活躍期のうち、記録類にその名の見えない時期は、康保三年十月侍臣舞以降、天禄二年六月「内蔵頭」（『日本紀略』）として登場するまでの四年余の間、及び天禄三年正月三日円融帝御元服に当り能冠を

藤原相如考

福井迪子

平安中期の歌人藤原相如及びその家集については、「中務」^{注1}関係の御研究

或は能宣、元輔などの面から少しふれられているが、まだまだとまった研究をみ

ないようである。また本文については、石川ひろみ氏^{注2}によって類従本・統国

歌大観・今井似閑本・松平文庫本より成る「校本」がつくられている。

相如に関する資料は、道兼との関係を語る『栄花物語』『大鏡』の記述の

他にはすべて和歌資料に限られる乏しさであるが、残された家集と同時代の

私家集相互の関係などから、周辺的に見る事は可能である。小考では極めて

周辺のものが多くなるが出自・境遇・交友関係・恋愛等について述べたい

と思う。併せて、相如の歌壇史的位位置をも見ることが出来れば幸いである。

なお、相如集の本文は「内閣文庫本」を用い、校異は主として「彰考館

本」でおこなったが、石川氏の校本をも参考させていただいた。

一家系・境遇

相如の家系は、藤原氏北家冬嗣公流に属する。時平の息、本院中納言敦

忠卿を祖父とし、右中将内蔵頭助信を父に、和泉守藤原俊連女を母として、

相如はいわゆる権門の末裔に生まれた。尊卑分脈によって系譜を摘記すれ

ば次のようである。

(尊卑分脈摘記)

